

Study Trip from Japan to Korea 2008

“Over Pride and Prejudice”

主催 ALSA Korea



18th~25th, August, 2008
Seoul, Korea

ALSA Japan 参加報告書



目次

0. 実行委員長挨拶
1. Opening Ceremony
2. Table Discussion (A~F)
3. Table Rotation
4. Symposium
5. Curriculum Exchange
6. Legal Course

7. Welcome Party
8. Life Style Exchange
9. Cultural Exchange
10. Cultural Night
11. Cultural Trip
12. Free Time
13. Farewell Party

14. 結びにかえて



0. 実行委員長挨拶

ST 2008 のすべての参加者へ

この挨拶を書くにあたり、私はなぜこの Study Trip(以下 ST)の実行委員をやっているのか、また、なぜ Asian Law Students Association Korea に入ったのかを考えていました。

私は大学の小さなグループだけでなくもっと多くの人に出会うために ALSA に入りました。考えが異なるより多くの人、大学の異なる人、異なる国の人に出会い、会話をし、考えや意見を交換したいと思ったのです。そしてそのような経験を通して、柔軟で理解力のある思考と、法律家として特に必要である公正な精神を身につけたいのです。そうです、私たちは韓国と日本の相互理解のために、そして寛大で公正な精神を養うために ST を行うのです。

地球上ではそれぞれ皆異なる60億人もの人々が暮らし、人種・国家・文化・歴史において様々なバックグラウンドを有しています。もし私たちが互いに理解できなければ何が起きるでしょうか。ただ血にまみれた歴史だけが残るでしょう。しかし、私たちには互いを理解することができる能力があります。そしてよりよい未来のためにそれを使うべきでしょう。

特に韓日関係は地理的要因によって偏見・独善と呼ばれる目に見えない問題の中(地雷地帯)に位置しています。私たち韓国と日本は地理的にどこよりも近い位置にしながら多くの対立があり、近年一つの「地雷」が爆発しました。なぜ私たち韓国と日本はいつもこうになってしまうのか。この関係のどこが悪いのだろうか。これは非常に難しい問題であり、この ST で主に扱うことはありませんが、ひとつだけ確かなことは、私たちは共にこの問題を解決すべきであり、対話と理解が必要だということです。

しかしながら正直な意見として、約20年間異なる人生を送ってきた私たちがたったの7日間で何ができるのか、という考えもいづらかぬぐいきれません。しかし私たちは若いのです。「若さ」が意味するものはなんでしょうか。「若さ」は不可能にみえることを可能に捉え、人々が躊躇してきたことを実行に移すことができます。

7日間で4回のテーブルディスカッション、13のプログラムがあるこの ST で私たち韓国と日本が互いに理解し、皆それぞれ異なるということを学ぶことを私は期待します。厳しい国際政治の中では、この ST の目標は不可能か、少なくともとても難しいものに見えるかもしれませんが。しかし先に述べたように、私たちは若いのであり、人々が躊躇してきたことを行うことができます。だから私たちはここにいるのです！ST は始まります。

Lee Jea young
ST2008 実行委員長

翻訳: 徳竹ゆき

(この挨拶は ST from Japan to Korea 2008 のパンフレットに記載されたものです。)

1. Opening Ceremony

文責：立教大学法学部 1 年 吉川拓馬

I. 日時・場所

日時：8月19日 9:00～12:00

場所：Seoul Women's Plaza

式次第： ALSA Korea 代表・実行委員長・ALSA Japan 参加者代表 挨拶

Go-sa (伝統的儀式)

各 Table Discussion (TD) の紹介

Pangoot (民族舞楽)

各 TD ごとにアイスブレイキング

II. 趣旨

Korea 側の司会の流暢な英語で式が始まり、両国の代表の挨拶となりました。両代表ともこれから始まる ST についての抱負を述べ、気持ちの良いスタートを切れました。スピーチ後には再び Korea、Japan 代表らによって、韓国の伝統的儀式である Go-sa が行われ、これから先の一週間の ST 参加者一同の安全と健康を祈願しました。

その後、Korea 側の Table Coordinator (TC) による各 TD のテーマ紹介を経て、再び韓国色の強い伝統的民族舞楽である Pangoot が披露されました。Korea 側はプロのパフォーマーを呼んでくれたようで、迫力満点の演舞が楽しめました。

最後には少々ながらアイスブレイキングタイムがもたれ、TD ごとに集まり自己紹介をしたり韓国のパーティーゲームなどで親睦を深め、お互いに打ち解けることができました。

III. 感想

会場に入ると ALSA Korea 側は相当数の人数でにぎやかに出迎えてくれました。その上、前述の通り、Go-sa や Pangoot など、「韓国に来たんだなあ」と実感させてくれる演出もあり、非常に歓迎されている心地がして個人的にはとても感動しました。アイスブレイキングなどでも ALSA Korea のメンバーはとてもフランクに話しかけてくれてすぐに友達になることができたのがうれしかったです。これから日本で開催する ST においても、こんなふうに盛大に、温かく相手を迎える事ができたらいいスタートが切れるなと思いました。

(立教大学 1 年 吉川拓馬)

2. Table Discussion

Table A

文責：日本大学法学部 1年 小田切洋司

I. テーマ・趣旨

The Jury System ~ 韓国で始まる陪審員制度について

韓国では既に陪審員制度が施行され、日本でも裁判員制度が始まります。陪審員制度全体の問題点を日韓以外の国の陪審員制度や国民の反応をみることによって考察していきました。全体としては、日本の裁判員制度、陪審員制度などの良い点、悪い点を考えることによって理想の制度を考案しました。

・ 議論の流れ

1 日目 ~ ・ 韓国の陪審員制度についてのプレゼンテーション

- ・ 日本の裁判員制度についてのプレゼンテーション
- ・ 映画「十二人の怒れる男」鑑賞、それに関するディカッション
- ・ ディスカッションを行ううえでの難語句の説明

2 日目 ~ ・ 映画「十二人の怒れる男」鑑賞の続き、それに関するディスカッション

- ・ 日本、韓国以外の国の陪審員制度、裁判員制度について良い点悪い点について考える
- ・ 裁判員制度と陪審委員制度の優れている点について挙げてみる

3 日目 ~ ・ 2 日目に引き続き日韓以外の国々の陪審員・裁判員制について良い点、悪い点を

- 考える
- ・ 陪審員制度全体の良い点、悪い点を考える
- ・ 理想の陪審制度を作る。

II. 感想

裁判員制度は日本では来年から、韓国では既に実施されている制度で、非常にタイムリーな話題です。確かに、制度としてはある程度固まっているものではありませんが、このディスカッションを通して話し合ったことは表面的な「裁判員制度について」ではなく、「司法とは・正義とは何なのか」という、法律の根源に関するものであったと思いに真剣に司法のあり方について話し合う一体感を通じて、法学生として正義・公平を追求する姿勢に日韓で違いはないのだな、と感じ取れたテーブルディスカッションでした。

(早稲田大学 3年 高橋郁)

国民が裁判に参加する制度は「裁判員制度」として日本でも導入されます。この制度につ

いては普段の活動で何度か触れ、自分の中でも議論し尽くしたつもりでいました。今回外国の人と話す中で、今まで気づけなかった論点が見えた気がします。具体的には「議決方法について」で、日本では単純多数決を採用しているが、韓国では全員一致制を採用しています。このことに注目したことはありませんでした。結局ST中に結論は出せなかったが、新しく考えなければならぬ点が出たことは自分にとって非常に有意義だったと思います。こういうところに、普段接しない人と議論を積むことの意味の一つがあるのではないかと気づくことができました。このこともまた非常に有意義だったと思います。

(早稲田大学1年 松尾直樹)

初めは英語で話すことに慣れていなかったのですが、英語で自分が考えていることをうまく表現することができませんでした。徐々に英語での会話に慣れることができたと思います。時間の関係でいくつか省いたのは残念でしたが、日本の裁判員制度だけでなく、米国や欧州の陪審員なども勉強することができてとても有意義でした。今回で得た経験は今後のALSAの活動や将来に生かしていきたいと思います。

(中央大学1年 百合野巨)

今回「韓国の陪審員制」をやるということで、日本でも2009年5月から裁判員制度が始まるということもあり、非常に討論しやすいテーマだったと思います。今回の企画を通して、日韓の裁判員制度・陪審員制度について熱い議論を交わしたのはとても貴重な体験であったと思います。それだけでなく、日韓以外の陪審員制度についても学ぶことができたので、韓国の陪審員制度を考える上で非常にわかりやすかったと思います。

(日本大学1年 小田切洋司)

Table B

文責：早稲田大学法学部 1 年 大原啓道

テーマ・趣旨

Cultural and Law

概要：文化と法の関連性・文化の法的保護について議論を行いました。

議論の流れ

文化とは何か？

概要：文化の定義をより鮮明にし、以後のディスカッションに生かす

Screen Quota

概要：保護貿易主義的立場から捉えた文化保護

- ・ Screen Quota を例とした国家の文化保護政策
- ・ アメリカ V.S. 日韓と、それに伴う日韓の立場の違い
- ・ 文化に優越はあるのか？

GATT (現 WTO) /GATS

概要：自由貿易主義的立場から捉えた文化保護

- ・ GATT/GATS の組織とその規定
- ・ GATT/GATS の例外規定 (Screen Quota)
- ・ 文化は商品か？

文化多様性条約

概要：GATT とは逆のスタンスをとった国際条約の認識とその規定

文化に対する新たな法律規定

概要：文化に対する法的保護の在り方の模索

.感想

個人としては、正直ディスカッションにあまりついていけず歯痒い思いをした。テーマが比較的抽象的で難解であったことは言い訳で、自己の知識不足・勉強不足・英語力不足は反省点である。だが一方、これが自己の新たな向上心の芽生えを促し、モチベーションとなったという立場から考えると満足している。また団体としては、まずホスト側の準備不足があったこと、逆にこちら側は、ホスト側から要求された以外のことはあまり調べずに渡韓してしまったことは反省すべき点である。さらに基本的には終始浅く裾野の広い議論に徹し、また各議題の難解で本質的な部分では、英語力に長けた人々の間のみに限られた議論になってしまっていたこともあり、これらを次回以降の国際交流企画では改善できるように努めたいと思います。

(早稲田大学1年 大原啓道)

こちら側の準備と予備知識と英語力の不足によって内容の薄い発言しかできなかったことを反省します。一方でテーブルメンバーと深く交流でき別れを惜しまれるまで仲良くなれたことはかけがいのない経験となりました。

(一橋大学1年 和田明)

韓国人から見た日本のイメージが聞いて新鮮だった。また韓国に行きたくなった。

(東京大学1年 三宅亮太郎)

初め日韓の違いが余り見えず議論が活撥でなかったが、ドイツ人のフィリップが途中参加してから新たな視点が導入され話し易くなった。文化に対する考え方とその規制の在り方に育った環境や教育がこうも影響するのかと驚かされた。

(東京大学2年 金澤忠宙)



Table C

文責：中央大学法学部 3年 星麻衣子

テーマ・趣旨

Information Control by Government and violation of Human rights of individual

政府による情報統制とそれによる人権侵害について討論を行いました。韓国と日本の現状を紹介しあうなどして、政府と国民双方にとって最良の情報管理システムはどんなものかについて話し合いました。

議論の流れ

- 1 日目 TD 1 韓国側による住民登録番号制度のプレゼンテーション
それについてのディスカッション
- TD 2 映画鑑賞 「V for Vanteda」
- TD 3 映画についてのディスカッション
日本側による住民基本台帳ネットワークについてのプレゼンテーション
- TD 4 日本側のシステムについてのディスカッション
これまでを踏まえて、最良のシステムについてのディスカッション

感想

テーブルの AC としてそれなりに自分自身準備をして行ったつもりだったが、初日から知識の足りなさや英語力の無さなどの力不足を感じました。ただ、韓国側が自分の言っていることを理解しようとしてくれたおかげで TD をなんとか無事に終えることができよかった。すべて英語で議論をするという初の経験を通して、自分に出来ることと出来ないことがはっきりと自覚できたので、出来ないことを出来るように変えていくことを今後の目標にしていきたいです。

(早稲田大学 1年 須藤真)

外国人と英語でディスカッションするのは初めての経験であり、最初はとても緊張しましたが、途中から楽しくなりました。韓国と日本の違いをしっかりと認識しつつも、自国のシステムにとらわれずに本音で話し合うことができました。また、実際にディスカッションするなかで自分の英語力の未熟さを痛感したので、これから英語力の向上を図りたいと考えています。

(一橋大学 1年 小山翔)

今まで日本人同士で英語でディスカッションをする機会はありましたが、外国人とは初めてだったので、最初のうちはとても緊張しました。しかし、ディスカッションを続けていくうちに互いの考え方の違いや、その根源にある文化、民族性の違いなども感じ取ることができ、ただの交流にとどまらない、有意義な経験ができたと感じています。次の自分の目標としては、英語力向上はもちろんですが、効果的なプレゼンの仕方を学んでいきたいです。

(中央大学3年 星麻衣子)

国際交流プログラムはもう何回も参加したことがありました。どこに行っても、テーブルディスカッションは絶対欠かせません。大体自分が用意したものをプレゼンして、お互いの問題点を議論するだけで済むだろう、どうせ観光とフリータイムはメインだから、と今回も私は勝手に思いました。しかし、今年のSTコリアには私に一番刺激を与えたのはまさかこのTDでした。

私たちの議題は日韓の住民登録制度に関する情報コントロールでした。外国人として日本での登録制度は日本人と大きな違いがあるのも初めて気がつきました。憲法13条から引き出したプライバシーに関する激しい議論や、市民から殺到した新しいシステムへの配慮と批判に対して経緯と背景の理解等の事前準備は大変勉強になりました。同じテーブルの皆さんは私の下手な日本語をよく包容してくれて、とても親切に説明してくれることにも感激しました。

韓国人大学生とのテーブルディスカッションを通して、お互いの性格と成長環境をよく知り、その理解の上に生の韓国人若者の考えを聞けるのも貴重な機会でした。韓国大衆の言論は普通に新聞や雑誌から知られないというわけでもないが、こういう少人数で思い切って議論することを通して得たものはもっともって感銘を受けやすく心に深い印象を残されるでしょう。未熟な法学生ですが、もうすでに自国の制度についてしっかり考え、大衆感情と国家管理両方から考慮しながら新しいシステムを提言するのとてもすばらしいと思いました。自分は法学生ではないが、一瞬法学生としての誇りを感じたような錯覚もありました。

テーブルディスカッションはまさに橋のように同じテーブルの日本人と韓国人を繋がっていました。サウナで遊んだり、飲み会に行ったりしてとても深い友情も築きました。2008年夏のこの経験は私にとって、一生にわたっても忘れられない貴重な記憶に違いありません。

(東京大学2年 樂嘉怡)

Table D

文責：中央大学法学部 2 年 張思遠

I. テーマ・趣旨

The Minority; focusing on Zainichi ~ 在日 ~

1945 年に朝鮮が日本から独立を果たした後も、200 万人以上の日本に住んでいた朝鮮人は日本国籍を奪取され、法的立場が確立されないままです。彼らの多くは「在日」として日本で生活していますが、彼らを取り巻く社会的差別やアイデンティティー等の問題を韓国と日本の法学生が話し合い、解決策を見つけていくことを目的とします。

・ 議論の流れ

- TD 1 : テーマ・スケジュールの説明、自己紹介の後、映画「GO」の鑑賞をしました。
- TD 2 : 日韓それぞれによる在日の法的立場のプレゼンテーションの後、ディスカッションをしました。「在日」と一言に言っても歴史的、法的背景から様々な立場があることを確認しました。
- TD 3 : 日韓それぞれによる在日に対する差別、在日のアイデンティティーのプレゼンテーションの後、ディスカッションをしました。両国の現状を確認後、解決策を模索しました。
- TD 4 : 在日に関する日韓間での条約の策定を行いました。策定に際してひとつひとつの文言、要件等に注意し、議論した後、締結に至りました。

・ 感想

自分は「在日韓国・朝鮮人」のテーブルでディスカッションしましたが、お互いに在日に対する認識や感情などかなり突っ込んだ議論をするモチベーションはあったと思います。ただ、事前準備でもう少し深いところまで調べをつけて自分の意見を固めておけば、さらに生産性のある議論ができたという感否めません。今後の ST においては事前の ALSA Japan 内でのディスカッションの機会などももっと多く設けて、準備を万全にしていきたいです。

(立教大学 1 年 吉川拓馬)

日本と韓国の学生が在日問題について議論し合う場を持てたことは、とても意義深かったと思います。それぞれの国の立場から話し合うことで、違った視点を知ることができました。また、短い期間でしたがお互い真剣に議論しあうことで、言葉の壁を乗り越えた友情が生まれました。今回の ST ではたくさんのお話を学び、考えさせられ、本当によい経験になったと思います。

(東京大学 1 年 砂川芽吹)

日韓の法学生同士で在日の問題について話し合えたのはとてもいい機会でした。しかし、差別の問題などお互いが肌で感じる事ができない状況下での話し合いだったため、“ケースバイケース”という一言で終わってしまったことが多かった点が残念でした。今後は、お互いの問題意識をさらに深め、両国間の連絡を密に取ることによって、より良いテーブルディスカッションにしたいと思えることができました。

(中央大学2年 張思遠)

在日を扱っているテーブルに参加して、生の韓国人の在日に関する意見・態度に触れることが出来たのは私にとって有意義な経験でした。韓国人と話したことで、在日が日本人でもなく韓国人でもない存在となっているという実感を持ちました。これからも在日問題に積極的に取り組みたいです。

(東京大学2年 原田悠希)



Table E

文責：早稲田大学社会科学学部 2 年 古橋卓也

I. テーマ・趣旨

「北朝鮮難民」

北朝鮮難民問題を扱ってゆくことで、難民の人権について理解を深めていきました。

II. 議論の流れ

TD1 日本・韓国側のプレゼン発表、難民条約の問題点についてのディスカッション

TD2 難民の地位の問題点についてのディスカッション、難民認定手続きの作成

TD3 UNHCR の権限についてディスカッション

TD4 ディスカッション「北朝鮮難民は難民として認められるべきか」

「北朝鮮難民をどのようにして保護してゆくのか」

III. 感想

海外の学生と社会問題を通じて法的なディスカッションを行えることは、日本にはめったに行うことができず、とても貴重な経験となりました。加えて、このような ST という場で AC という重要な役を行えた事は、自分への成長へも大いにつながるものです。また機会があるのならば、ぜひもう一度参加したいと思います。

(早稲田大学 2 年 古橋 卓也)

テーブルDでは韓国の学生の北朝鮮難民に対する考えを知ることができ、とても興味深いものでした。日本では北朝鮮の問題といえば拉致問題と核問題が先行しているのが現状だと思います。もちろんこれらも非常に重大な問題ですが、なんとかして北朝鮮難民を救いたい、だから日本にももっと注目をしてほしいと韓国の学生は考えているようです。しかし一方で議論をすればするほど、北朝鮮難民を救うには韓国と日本の協力だけではどうにもならず、東アジア全体で取り組まなくてはならないということを知りました。この問題の奥の深さを思い知りましたが、だからこそまずは韓国と日本が力を合わせて解決策を模索することが、北朝鮮難民のためであり、将来の韓国と日本の関係のためにもなるのではと思いました。

(中央大学 3 年 徳竹ゆき)

自分は、北朝鮮の難民問題について普段あまり深く考えたことがなかったのですが、STの事前学習や、TDを通して深く考えさせられました。明確な結論は、最後まで出来なかったけど、北朝鮮難民や難民問題について、興味を持たれたことはとても大きな成果だと思

ました。また、英語でディスカッションすることは、初めてで戸惑うこともありましたが、周りの人達に助けをもらい、何とか形にすることができて良かったです。次回は、もっと積極的に議論が出来るように、英語に力を入れていきたいです。

(中央大学1年 田中陽一朗)

今回のSTのテーブルディスカッションでは、普段の大学で行う Academic Activity ではできないような貴重な経験がたくさんできました。ほとんど英語で議論することはもちろん、事前に問題について調べた上でディスカッションに臨むのも初めてでした。事前勉強のおかげで、相手の言っていることは大方わかるのに、自分の言いたいことが伝わらない、という悔しい思いもしました。このテーブルを経験することで自分のモチベーションを上げることができました。

(東京大学1年 村山乃理)

私は、今回初めて日本人以外の人とディスカッションをしました。最初は、ほとんど英語で日常会話もしたことがないのにディスカッションできるのか不安でした。しかしいざその時になってみると、意外と単語が口から出て来て、なんとか話すことができて良かったです。それでもやはり北朝鮮難民をテーマとしたディスカッションとなると、明確に自分の意見を伝えるのが難しく、何度も悔しい思いをしました。自分の英語力の無さを実感でき、良い刺激を受けることができた良い経験になりました。

(東京大学1年 坂本 美南)

Table F

文責：早稲田大学第一文学部 3年 西井さやか

テーマ・趣旨

Environment and Law ~ 環境と法 ~

議論の流れ

私たちのテーブルでは、日本側と韓国側がそれぞれ事前に調べた内容を発表した後、その内容に基づいてディスカッションを行いました。また、最終日には、ディスカッションで扱った環境問題に関するキーワードを抜き出し、それらを中心にクイズを作成しました。

発表及びディスカッションの内容は下記の通りです。

< 1 日目 >

TD 1

・プレゼンテーション

The case of environmental pollution in Japan and the decision of Japanese court

Comparison of the legal principle of tort in Japanese Civil Law and the act on the environmental pollution

・ディスカッション：「各国の民法・環境法と過失責任に関して」

実際に各国で問題となった環境問題に関して

民法と環境法の位置づけ

民法の原則・環境法の原則とは

等を踏まえたうえで話し合いを行いました。

< 2 日目 >

TD 2

・プレゼンテーション

The official opinion on the border-crossing environmental pollution (such as the yellow sand from China) of Japanese government or any convention on this matter

The problem of government's opinion or the convention on the border-crossing environmental pollution

The possible regulation on the border-crossing environmental pollution

・ディスカッション：「国際法下において、環境問題の責任はどこまで国が負うべきか」

韓国で深刻な被害をもたらしている黄砂を事例に挙げ、GATT や WTO の活動も踏まえた上で話し合いました。

TD 3

との議論は困難もあったが、新しい発見もあり勉強になった。

(一橋大学1年 石岡大祐記)

日本と韓国では環境問題に対して無過失責任主義を採用するなど、法的な考え方で似通っている部分が多い一方で、韓国では、責任を負う主体が労働者レベルにまで及んでいるなど、日本と異なる部分も多かったです。オゾン層の破壊、地球温暖化、生物多様性の喪失など、現在、地球上では、様々な環境問題が進行しつつあるが、そうした環境問題の特徴は、国家レベルの解決が不可能な点であり、グローバルな視点が必要とされている点である。今回のテーブルディスカッションでは、条約の作成までは至りませんでした。互いの国の法制度について、環境という視点から、交流することができたのは、グローバルな視点に一步近づいたように思えました。千里の道も一步より始まるというし。

(東京大学1年 倉田基司)

Table F では今回「Environment and law」というテーマでディスカッションを行いました。自分は黄砂について調べることになり、黄砂は日本では身近な問題ではなかったので最初のうちはその情報収集にかなり苦労しましたが、調べていくうちに黄砂に対する知識も増えていきました。肝心のディスカッションでは論点についての知識が不十分なところもありましたが、黄砂の問題についてはかなり深い話もできたので、個人的には満足しました。来年の目標としては、焦点を当てるポイントを明確にして、それらに対してきちんと自分なりの考えを持つことだと感じました。また、テクニカルタームを事前にある程度調べておくべきだったという反省点もあります。また、最後の夜は、テーブルのメンバーでカラオケに行きました。言語は違っていてもカラオケの面白さを共有でき最高の思い出となりました。最後にみんなで歌った曲はなんと100点満点でした。今回このメンバーでテーブルディスカッションのみならず、買い物や花火、ゲーム、ティーパーティ、カラオケなど様々なことができ本当に良かったです。

(中央大学1年 庄野暢)

3. Table Rotation

文責：中央大学法学部 1 年 百合野亘・田中陽一朗

I. 日時・場所

日時：8月22日（金）

場所：Seoul Women's Plaza

II. 趣旨

テーブルディスカッションの成果を全員が共有すること

III. 内容

各テーブルが、ゲーム・劇・プレゼンを通して成果を発表しました。

TD A：lay judge system と jury system についての違いを比較しながらのプレゼンテーション

TD B：文化多様性条約などについての ×クイズ

TD C：国家と個人情報保護について韓国の場合と日本の場合に分けて具体的なシチュエーションに基づいての劇

TD D：在日朝鮮人の日本における権利とその問題についての ×クイズ

TD E：難民問題についてのプレゼンテーション（条約作成）

TD F：環境問題とそれに関わる国際法についての早押し形式のクイズ

IV. 感想

どのテーブルも TD で話し合った内容が簡潔に、分かり易く発表をしてくれて、とても良かったです。さらに、×問題・クイズ・劇など、発表形式がテーブルごとに違い、工夫されていて良かったです。また、他のテーブルのことを聞くことによって、自分の知らないことに関して知識を得ることができ、いろいろと考えさせられることがありました。しかし、時間が限られていることもあり、TD で話し合った内容が、大まかにしか分らなかったのは残念だったので、来年はもう少し発表の時間と準備の時間を取れると良いのではないかと思います。（田中陽一朗）

どのテーブルもディスカッションの内容を工夫して発表していました。×ゲームやクイズ形式にして発表するテーブルが多かったのですが、どれも簡単なものではなく、かなり知識の必要なものが多かったです。また、プレゼンやビデオ形式で発表したテーブルもあり、非常に印象的でした。どのテーブルも ST が始まる前に、韓国側がディスカッションの準備をかなりしていたようで、ホスト側は大変なのだと思っていました。自分のテーブル以外のテーブルのことをよく知ることのできる機会だったので、とても有意義な時間だったと思います。（百合野亘）

4. Symposium

文責：早稲田大学法学部 3年 高橋郁

I. 日時・場所

日時：8月21日 14:00～16:00

場所：Seoul Women's Plaza

II. 趣旨

私達は、大学生として、重大な社会問題についての原因と解決先を探そう努め、活動していく必要があります。著名な教授の講義を拝聴することは学生として必要な経験の一つであり、本シンポジウムでは、お話を聞くことにより、社会問題についてより深く考えるきっかけとなることを目指します。

III. 内容

講演者：Tae-hyun Kim 中央大 国際学大学院教授

国際関係がご専門であり、特に核問題に関して研究していらっしゃいます。

講演テーマ：North Korean Nuclear Problem & Peace of East Asia

(ア) Controversial points of The Nuclear Non Proliferation Treaty

(イ) Why North Korean carried out an nuclear experiment

(ウ) The influence of nuclear proliferation

(エ) The mutual relation between North Korean nuclear development and peace of East Asia

IV. 感想

北朝鮮の問題については、日韓のみならず、現在の東アジアにおける平和問題の最も重要なものの一つであると言えます。東アジアの国である日韓の学生がこのような問題について考える機会があるということ自体とても有意義なものであると感じました。さらに、韓国の著名な教授のお話を伺えたということは、日本の学生にとっては非常に貴重な機会であったと感じます。先生も最初に述べていらしたように、法学生としてこの問題に真正面から取り組めることはあまりありません。しかし、北朝鮮の核保有の狙いは、核を保有することで他国の興味を引き、交渉の材料とすることであり、各国は経済力などで対応していくべきであるという考え方は日本と韓国共通であり、各国の足並みをそろえた対応が非常に重要であると感じました。

(高橋郁)

5. Curriculum Exchange

文責：東京大学文科 類1年 坂本美南

I. 日時・場所

日時：8月21日 16:00～18:00

場所：Seoul Women's Plaza

II. 趣旨

日本と韓国の学生が、それぞれの大学での日常生活と、両国の司法試験制度について理解を深めることです。さらにこのプログラムを通して、日韓の学生を比較でき、友好関係の発展につなげることを目指します。

III. 内容

1. 韓国側のプレゼンテーション

日本と韓国のロースクール、司法試験制度の比較

韓国の法学部カリキュラムの紹介

韓国の学生の大学生活・年間行事の紹介

韓国の大学のユニークな授業の紹介

2. 日本側のプレゼンテーション

早稲田大学のユニークな授業の紹介

3. 質問シートを使った、大学生活についてのトーク（日本人と韓国人で二人組になって）

IV. 感想

このプログラムでは、韓国の大学生の日常生活について知ることができたのが一番良かったと思います。学園祭などの年間行事や授業、サークル活動では、日本と似ている部分が多く、海外とは言ってもやはり隣国であることを実感しました。ユニークな授業に関しては、ワインの飲み方についての講義など、日本ではかなり珍しい授業もあるとわかり興味深かったです。日本にいてメディアを通じて知る韓国の様子だけでは見えてこない部分が多くあるのだなと改めて感じました。また質問シートを使ったミニディスカッションでは、サークルのことや授業のことについて、韓国の子と英語を使って良い雰囲気です話そうことができたと思います。英語で会話ができる楽しさを感じると同時に、語学力の必要性を感じました。この企画は今回から初めて導入されましたが、次回からも継続させてほしいと思います。

（坂本美南）

6. Legal Course

文責：東京大学教養学部 2 年 金澤忠宙

I. 日時・見学先

日時：8月22日 9:00～12:00

場所：憲法裁判所

II. 趣旨

韓国は憲法裁判所という日本に無い司法機関を持ち、そこには憲法に対する姿勢において日韓の相違が窺えます。更に韓国はアジアに先駆けて憲法裁判所を設置した国でもあり、この憲法裁判所を訪れる事で韓国の法文化に触れる事を狙いとします。

III. 内容

まず憲法裁判所の紹介ビデオを見ました。憲法裁判所は長らく独裁が続いた大韓民国の歴史に鑑み、民主化運動が実を結んだ1988年に設置されました。以来映画法の定める映画の事前検閲・儒教道徳に基づき同姓婚を禁じる民法規定など様々な法律に違憲判決を下す他、公権による人権侵害の訴え・高級公務員弾劾の是非・政党解散審判などを職掌とします。近年では取扱件数は年千件以上に上っています。

質疑応答では憲法裁判所の裁判官とそれを補佐する研究官の仕事の分担についての質問の後、「なぜ大法院（韓国の最高裁判所）と憲法裁判所を分けるのか」という質問が出ました。之に対する回答は「韓国には違憲立法審査権を持つ大法院が独裁政権下で権限を行使してこなかった過去があり、民主化の際民衆の要求で憲法裁判所が作られた」というものでした。（現在大法院も引き続き違憲立法審査権を有しています。）

この後実際の法廷を見学し、訪問を終えました。

IV. 感想

憲法裁判所が年千件以上を扱うというのに驚きました。日本の、普通裁判所が違憲審査機関を兼ね、しかも具体的な争訟でのみ憲法判断がなされるという状況と比べると、社会が憲法や人権を（浮ついた物としてでなく）意識する度合いはかなり異なると思われます。之は優劣の問題というより、質疑応答でもあった様に国民が闘って権利を勝ち取ってきた韓国の歴史に負う所が大きい。正に風土が法制度に影響するという、法文化の典型例といえるでしょう。

（金澤忠宙）



7. Welcome Party

文責：一橋大学社会学部 1年 小山翔

I. プログラム概要

日時：2008年8月19日 20:00～22:30

会場：Soul Women's Plaza

趣旨：ST参加者同士での懇親を深める

II. 内容

パーティのコンセプトがワインであり、ドレスコードとして ワイン が指定され、全員がフォーマルな服装に身を包みました。ワインの飲み方についてのレクチャーを受けた後、乾杯。その後は立食形式でフリータイム。最後にじゃんけんゲームを行いました。

III. 感想

学生では体験できないと思えるほど豪華な雰囲気で行われました。ワインも赤、白両方用意され、食事もとてもおいしいものでした。立食形式ということで、初めて会う人に対しても気軽に話しかけやすい雰囲気でした。Table の枠を越えて多くの人と親睦をふかめることができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。「Hello」と話しかければ、「Hi!!」と気さくに返事をしてくれて、大学のこと、家族のこと、将来のことなど様々なことを話すことができました。そして、写真を撮ったり、名刺を交換したりしました。はじめはあった緊張感もしだいにほぐれていき、親睦を深めることができました。

また、ドレスコード ワイン はとてもユニークなものでした。具体的には

Connecting concepts: 白 (white) 赤 (red) 酒 (alcohol)

Caution: formal dress only

というものでしたが、どの程度忠実に守ればよいのか？ 酒 (alcohol) はどうやって表現すればよいのだろうか？ という疑問が生じました。しかし、実際には韓国側もあまり従っているわけではありませんでした。大切なのは雰囲気であり、楽しむことです。

この Welcome Party によって、日韓の違いをこえて懇親を深めることができ、これから本格的に始まる Study Trip を楽しく充実したものとすることができました。

(小山翔)

8. Life Style Exchange

文責：東京大学文科一類1年 倉田基司

I. プログラム概要

日時：8月20日19時～21時

会場：Seoul Women's Plaza

趣旨：日韓の大学生の生活を互いに紹介する

II. 内容

韓国側は、韓国語によるデートの会話と飲み会のゲームを紹介してくれました。デートの会話の紹介では、カフェで自己紹介がなされ、公園で散歩し、最後に、相手が気に入った場合と気に入らなかった場合の会話がモデルとして韓国側により実演されました。また、飲み会のゲームでは、ヤノイマ（円になり、人を指さしながらヤ・ノ・イマを順番に言っていくゲーム。ただし、ヤとノの時は指された人ではなく、発言した人の右隣の人が次に発言する一方で、イマの時は指された人が次にヤを言う）が行われ、負けた人がビールとソジュ（韓国の酒）、コーラを混ぜたものを一気に飲みました。

一方、日本側は、デートコース、日本式居酒屋、王様ゲームを紹介しました。デートコースでは、ベイブリッジやフジテレビなどの写真がパワーポイントで映し出されました。また、居酒屋や王様ゲームは韓国にもあるそうです。王様ゲームに関しては、日本側の有志の方々が実演し、会場が大いに盛り上がりました。

III. 感想

飲み会のゲームを行っている際の韓国側のテンションの高さは日本人とは比べ物にならないほど、高かったです。

韓国側がデートの会話を紹介してくれた際に使用されたプリントには、韓国語・英語・ハングルの発音を記したローマ字の3種類が書かれていたのですが、日本のヘボン式と違ったので、発音が難しかったです。

日本と同じように、居酒屋や王様ゲームがあることを知り、日本と韓国が近い国であることを実感しました。

（倉田基司）

3. Culture Exchange

文責：東京大学教養学部 1 年 砂川芽吹・村山乃理

・ プログラム概要

日時：8月21日 19:00～22:00

会場：Seoul Women's Plaza

趣旨：積極的な参加を通して韓国のさまざまな文化を経験することで、お互いを知り、友好を深めることを目的としました。

・ 内容

4つのグループ(A・B・C・D)に分かれ、班ごとにそれぞれのブースを回りました。韓国伝統文芸であるハンジーや韓国家庭料理であるトッポキとキンパを作り、伝統的なゲームや日本のけん玉と一緒に体験しました。

・ 感想

工芸品のハンジーやトッポキ・キンパといった韓国料理、伝統的なゲームである Yut Nori を韓国人に教わりながら一緒に作ったり遊んだりしたことで、自分達の知らない韓国の文化を知ることができました。また、けん玉作りでもお互いに協力してペットボトル製のけん玉を作り上げ、その最中の会話で自然と日本のけん玉の話が持ち上がったことなどを通して日本の文化も韓国側に伝えることができました。このように culture exchange では韓国の文化を私たち日本人が学ぶことが主でありましたが、それを日韓がともに協力することで互いに打ち解け、互いの文化に対する理解を深めることのできるよい経験ができたと思います。

(村山乃理)

韓国の工芸品や料理など実際体験することで、短時間のなかでもスムーズに韓国文化を知り、興味を持つことができました。また、ゲームのときは一緒に熱中して楽しむことができました。ただ説明を聞くだけの場合とは違い、自国とは違う文化を実際体験することでより深くお互いの文化を知ることができたと思います。さらに、culture exchange の時間は学生相互の交流にもつながり、打ち解けあうことができました。

(砂川芽吹)

10. Cultural Night

文責：東京大学教養学部 2 年 原田悠希・樂嘉怡

I. プログラム概要

日時：8月22日20時～22時

会場：Women's Plaza

趣旨：日韓両国の学生がお互いに両国の文化を紹介しあい、両国の文化に対する見識を深めることによって、両国のより良い関係を築き作り上げていくこと。

II. 内容

- 1、日本からの出し物（三味線、相撲、輪になって踊ろうの合唱）
- 2、韓国からの出し物（扇子を使った踊り、モダンなダンス、DJ OZMA の合唱）
- 3、交流&記念撮影

III. 感想

日韓両国の学生が、お互いの文化について知り合う良いきっかけとなったと思いました。日本側が浴衣・甚平を着て、韓国側もチマチョゴリ等の伝統衣装を身に付けたことによって、文化交流の雰囲気醸し出されていました。日本からの出し物の中では特に相撲が韓国人に評判が良かったように思います。韓国側からのボランティアが、日本の参加者と白熱した取り組みを行っていた様子は、私の脳裏に強く刻まれています。韓国人にとっても、日本の伝統文化である相撲を体で実感できた非常に有意義な場だったのではないのでしょうか。韓国からの出し物では、扇子を使った踊りが印象に残っています。韓国の伝統的な衣装に身を包みながら、華麗な扇子を参加者が一体となって扱い踊っている様子は、非常に優美でした。出し物が終わった後に、沢山の写真を撮ることが出来て、良い思い出になりました。

（原田悠希）

Asian Forum の豪華な Cultural Night と比べて、今回 ST の Cultural Night は親しい友達の集まりのような悠然さが特徴でした。軽く床に座ったり、隣の人と挨拶したり、ステージで踊っている友達に笑顔とアプローズを与えたりして、色彩が満ちたホールに柔らかくリラックスな雰囲気が溢れていました。相撲の競技で韓国人は力尽き参加して、韓国の踊りに日本人は思い切り喝采するのも文化の尊重と理解をよく体現できました。最も近い日本と韓国の間でさえこのような異なった伝統文化を持つのに驚く一方で、文化の地域性と多様性にも思わず感服しました。パフォーマンスの後の写真タイムに様々なグループで写真を撮りました。名前さえ知らない人と一緒に笑って、歓呼して、写真を撮って、奇妙な一晚を過ごしました。言葉と慣習の違いは国際交流の障碍になるかもしれないが、文化の交流に

おいて心さえ広く開けて、眼で見たもの、耳で聞いたもの、手で触ったものがすべて心の中に受容されたら、誰でも簡単に理解できるだろうと私は思いました。STはアカデミックの勉強だけではなく、お互いの悠久な文化を自ら体験して引きとめるのも目的の一つであることをもう一度理解しました。

(樂嘉怡)



11. Cultural Trip

文責：早稲田大学法学部 1 年 松尾直樹

中央大学法学部 3 年 照屋さつき

I. プログラム概要

日時：8月23日

会場：ソウル市内

趣旨：韓国の歴史的な名所・観光スポットを見学することで、韓国の歴史や現在の文化・社会を肌で感じ、韓国について理解を深めるとともに、日本のそれと比べることによって、日本についてもまた理解を深めるというものでした。

II. 内容

コース A：

国立中央博物館～南山コル韓屋村～仁寺洞～景福宮～貞洞劇場

コース B：

景福宮～仁寺洞～南山コル韓屋村～明洞～貞洞劇場

コース C：

景福宮～仁寺洞～タブコル公園～西大門刑務所歴史館～清溪川～貞洞劇場

コース D：

国立中央博物館～仁寺洞～景福宮～明洞～貞洞劇場

コース E：

戦争祈念館～仁寺洞～昌徳宮～清溪川～貞洞劇場

III. 感想

まず国立博物館ですが、アジアで一番大きいとあって、その建物は迫力がありません。私たちが訪れた時には、ペルシャ展と韓国展の二つが公開されていました。当然韓国展を見たわけですが、衛氏朝鮮など古い時代のものから日本占領下のものまで長い歴史が展示されていました。古代から日本と朝鮮は互いに影響を受けたり与ったりしていたことがよくわかりました。日本占領下の日本軍の愚行の証拠となるような展示品は、日本人としてとても心に響きました。近くて遠い国と呼ばれた韓国だが、全くその通りで、隣国に対して無知であったことを痛感させられました。

次のナムサンゴルでも同様のことを感じました。建物の様子は日本の江戸時代の建築とよく似ていました。ちょうど日本が韓国併合を行う直前の建物で、その頃の様子を想像してしまいました。昼食は韓国料理、ビビンパや冷麺を食べました。箸を使うところは日本と同じですが、ご飯はたいてい何かと混ぜて食べるようです。ビビンパを食べる時にご飯と具を別々に食べることは、そばを食べる時につゆと麺を別々に食べるようなものだろう

です。

次は王宮へ行きました。王宮はとにかく広く歩き疲れましたが、こんなに広いのは昔の王様が愛人と隠れて過ごすために造った建物など、強い権力によるものだという実感もわきました。夕食後は劇場で韓国の伝統芸能のようなものをみました。韓国の伝統芸能は日本のものと違い、エンターテインメント化していて堅苦しくなくおもしろかったです。伝統が重みを失った様に見えるのは少し残念に思いました。

この Cultural Trip では韓国文化と日本文化の多くの共通点又は相違点を認識でき、非常に有意義なものであったと思います。そして、日本に外国の人が来た時に日本の文化について説明できなければそれは恥ずかしいことだと感じたので日本についても見識を深めようと思います。

(松尾直樹)

ソウル市内の観光地を同年代の韓国人学生と巡る Cultural Trip は、予ねてから韓国の芸能・文化に興味があった私にとって、大変待ち遠しいプログラムでした。

私が参加した A コースでは、まず国立中央博物館を訪ねました。3年前に開館したばかりのこの博物館には、実に様々な文化財が収められています。従来の博物館の、3倍もの数の展示物があるというそのスケールの大きさに、私は圧倒されました。その広大さゆえ、2時間の見学時間はあっという間に過ぎてしまいました。

博物館を見学後、昼食を挟んで向かった南山コル韓屋村では、当時のまま保存されてある韓国貴族の邸宅を観覧しました。ここでは様々なイベントや体験プログラムが用意されています。そこで私は幸運にも、その時広場で行われていたイベントにて餅つきを体験することができました。

次に訪れた仁寺洞は、700mほどのメインストリートを中心に、ギャラリーや伝統工芸品、伝統韓定食、伝統茶などのお店がズラリと並び、ソウルの人気観光スポットです。ここではケアテイカーのアドバイスを頼りに、家族や友人へのお土産を買いました。

夜、貞洞劇場で観賞した舞台は、とても刺激的なものでした。韓国に伝わる伝統芸能の舞踊、器楽、ソリ(歌)、サムルノリ(打楽)がバランスよく盛り込まれた舞台は、言葉は分からなくとも、目、そして耳で十分に楽しむことができました。「面白い!」「楽しい!」と感じるポイントは、日本人も韓国人も同じなのだという事を再認識できた舞台だったと思います。

この Cultural Trip を通して感じたことは、やはり日韓両国の文化の共通性、多様性です。「似て非なる」とはよく言いますが、まさに日本と韓国を指し示している言葉ではないか。そう感じます。そして何と云っても、私の韓国語学習を刺激する、大変良い機会になりました。「今まで以上に韓国語を学び、次の訪韓に繋がれたら。次はもっと多くを見聞することができるように。」そう思えた Cultural Trip は、私にとってかけがえのない思い出です。

(照屋さつき)



12. Free Time

文責：東京大学理科 類1年 三宅亮太郎
早稲田大学法学部 須藤真

I. プログラム概要

日時：8月24日

会場：ソウル市内

趣旨：韓国の観光名所や伝統的な場所を訪れることで、韓国の歴史や最新の文化を感じると共に、お土産を買って韓国での最後の一日楽しみ、今回の ST to Korea を締めくく

る。

II. 内容

徳寿宮の観光 昼食 南大門でショッピング 新村の町の観光 (三宅)

梨花女子大学 ランチ(焼き肉、冷麺) ミョンドンに移動 デザート(ヨーグルトアイス)
プリクラ、インサ・ドンに移動 買い物 LOTTEデパート(買い物) 再びインサ・ドン
に移動 買い物 (須藤)

III. 感想

ケアテイカーの交渉で、徳寿宮の前では韓国の民族衣装を着ることができた。また、南大門や新村などの観光の際も土地勘のある韓国人のおかげで効率的に観光ができ、日本人だけで観光するよりずっと有意義な観光ができたと思います。日本人だけだと観光地だけしか見て回れないが、今回は普通の韓国人が行っている店などに入ることができ、より文化の違いを感じることができました。

(三宅亮太郎)

僕は始めにインチョンにある女子大学に行きました。大学に行く道には多くの店があり学生街のようでした。その大学はかなり大きく、とてもきれいだったので驚きましたが、韓国の大学はどれもこんな感じだと聞いてさらに驚きました。建物それ自体だけではなく、景色や道もきれいでした。また、山の近くにあるためか、坂が多く上に行くまでがとても大変でした。法学部は上のほうにあるため通うのが大変だと言っていました。大学内にはコンビニだけではなく服屋などもあり日本との違いを感じました。数名の学生を見ましたが、みんなお洒落でお嬢様の雰囲気が出ていました。寮は大学構内にあり女性なら誰でも入ることができるのですが、セキュリティがとてもきついそうです。日本ではあの規模の大学はほとんどないと思うのでとてもうらやましく感じました。そのあと近くの店で焼肉と冷麺を食べに行きました。韓国の焼肉はぜひ食べてみたかったのでとても楽しみに

していました。焼肉の肉がとても厚く、サンチュでまいてキムチをはさんで食べるなど今まで食べた事のないものでしたが、とてもおいしく食べられました。肉を焼いたり切ったりするのは全部店の人がやってくれました。冷麺は最初に麺をハサミで切っているのを見てびっくりしました。あと、チヂミやキムチは無料で次々と出てきました。焼肉は一人8000ウォンだったため、ランチとしては少し高いかもしれないとケアテイカーは心配していましたが、内容に大満足しました。

焼き肉を食べておなかいっぱいになった後、ミョンドンに移動してヨーグルトアイスを食べに行きました。その道中の露店ではブランド物のバッグがかなり安い値段で売っていました。ヨーグルトアイスは日本でも売っているらしいですが、僕にとっては初体験でおいしかったです。

その後はみんなでプリクラをとり、それをみんなで分け合った後、韓国の伝統的なものが多く売っているインサ・ドンに移動しました。100mほどの通りの両側にたくさんの店があり、韓国伝統の飴のようなものを食べながら見て歩きました。ここにもたくさんの日本人観光客がいて、店員さんにも日本語を使える人が多かったです。

次にLOTTEデパートに行きました。このデパートでは韓国土産の食料品を買いました。ここでも日本語を話せる店員が多く、買い物しやすいです。キムチや韓国海苔などの定番のものから、ラーメンや普通のお菓子、アルコール類まで販売されていて何を買おうか迷いました。僕はここでキムチを買いましたが、韓国のキムチは日本のものとは全く違い、キムチを食べることで日本に帰ってからも韓国のことを思い出すことができました。

その後は再びインサ・ドンに行ってお土産を買い足しました。ケアテイカーがここで売られている韓国伝統のお菓子を、韓国で一番おいしいと思う、と言って勧めてくれたのでそれを買いました。日本にはないような味と食感で本当においしかったです。道には結構人がいて、ケアテイカーについていくのが大変でした。日本よりも物価が安いので、つい多くのものを買ってしまいましたが、最後は時間がなくなってしまい、急いでタクシーに乗ってホテルに帰りました。韓国での最後の一日をケアテイカーの助けもあって、韓国の伝統や流行を感じながら、いろいろな所を回ることができてとても楽しむことができました。いつか再び韓国に行きたいと思えるような旅行になりました。

(須藤真)

13. Farewell Party

文責：中央大学法学部 1年 庄野暢

I. プログラム概要

日時：8月24日

会場：ソウルの夜景がよく見えるレストラン

II. 内容

- ・ 翌日 25日は朝から日本への出発であったため、この ST 参加者が一同に集うのはこれが最後であった。
- ・ ウェルカムパーティとは違い、みんながそれぞれお洒落なスタイルに身をつつんで来場した。
- ・ レストランは高層ビルの1番上の階にあり、そこからはソウル市の綺麗な夜景を見ながら食事を楽しむことができた。
- ・ 最後の宴を飾るにふさわしく、料理はこの ST なかで最も豪華であり、種類も豊富であった。なかでもキャビアが出されたことには非常に驚いた。
- ・ 会場では日本側から徳竹さんの挨拶、さらにはその日までの写真をスクリーンに写し出すなどして盛り上がった。
- ・ 韓国側や日本側からお互いにプレゼント渡しあったり、写真をたくさん撮ったりと、お互いに最後の時間を惜しみあっていったように思われた。

III. 感想

ST の最後のお別れ会の意味をこめて行われたこのフェアウェルパーティ。個人的な感想としては、もうこの時すでに翌日のお別れを意識していたため、パーティを楽しみつつも写真を撮りながらも、寂しい思いをしていた。特にプレゼントを貰ったときは嬉しくてたまらなかった。出発する前はどうなることかと心配したが、英語というコミュニケーションツールを使って韓国の友達が作れたことにとっても満足していた。来年日本がホスト国の時には精一杯おもてなしをしようと思ったのもこのときである。特に、一番多くの時間を共にし、サポートしてくれた同じテーブルのメンバーには感謝の気持ちでいっぱいである。日本から一番近い外国、韓国をとっても身近に感じることができ、今後もっと深く韓国について知っていきたいと感じました。フェアウェルパーティのあとはテーブルごとに遊びに行くなどして、本当に最後のフリータイムを各テーブルで楽しんでいました。

(庄野暢)



14. 結びにかえて

私は今回の Study Trip (以下 ST) で ALSA Japan 参加者 27 人の代表を務めました。時に敵対的感情を互いに抱く日本と韓国であります。私たち学生の草の根的な交流は将来の日韓にとって良い影響をもたらすに違いないと思っています。また、私個人としては今まで Study Trip from Asian Countries to Japan 2006 と Study Trip from Korea to Japan 2007 に参加し、今回は 3 回目の ST となります。3 回にわたる私の ST 経験を振り返ると成長を実感することができます。ST とは自分自身について新しい発見をできる場であると感じています。

2006 年の ST では私はただ参加するのみ、ただついていくのみで精いっぱいでした。数日間にわたって外国人と英語で会話をすることだけで緊張してしまった私はディスカッションに積極的に参加し、各プログラムを楽しむまで余裕はありませんでした。外国人を外国人として区別し、自分自身の中で壁を立て、意識してしまっていたのかもしれませんが。

2007 年の ST ではスタッフとして長い期間準備をし、本番中は忙しく走り回り、学生による企画運営の苦労とおもしろさを知りました。

今回の ST では ALSA Korea のメンバーと会話をする際に特別の緊張はありませんでした。2 年前とは違い、気持ちに余裕のできた私はディスカッションで自分の意見を言うことに対する抵抗は減りましたし、各プログラムを存分に楽しむことができました。また、去年の経験から企画を運営することがどんなに大変かもわかっていたので、ゲストとして参加しつつも、スムーズに進行が進むように代表として努力をしました。もちろん今回の ST でも課題は残りました。しかし確実に 2 年前の自分よりも今の自分のほうが、よりオープンで視野が広がることができましたと思います。

このように ST の参加者全員が自分自身の変化を感じていることでしょう。ALSA Japan と ALSA Korea との間で行われた今回の ST は日韓の交流を深め、参加者全員一人一人の成長を促した違いありません。

ALSA Japan 参加団代表
中央大学法学部 2 年 徳竹ゆき